Extended Imaginary Number Theory · III

透

—— 歪みなき媒介という祈りの極致 ——

Tōh: Undistorted Mediation, the Culmination of Prayer

村主悠真 / Yuma Muranushi
Founder, 株式会社 il / 虚次元法人 ï.inc
Tokyo, Japan · iii@iii-iii.com
ORCID: 0009-0004-3697-4197
Version 1.0 · 2026.06.01

要旨 / Abstract

本稿は拡張虚数理論の第三論文として、第二論文「『起こり』の構造論」（村主, 2026b）が整理した「起こり」の上位概念 ——「透」—— を主題とする。第二論文の「起こり」が、捕捉する主体と捕捉される出来事の分離を前提とした離散的事象であったのに対し、透はその分離が解消し、主体が起こりの絶え間ない自己生起の媒体となる極限を指す —— 起こりの続編ではなく、その反転的完成である。本稿の中心的主張はこの主体の反転 —— 捕捉する者から媒体への転回 —— にある。

透の発動条件を、本稿は「成る祈り」（becoming-prayer）として形式化する。成る祈りは主客分離が解消する地点であり、純度 P（第一衝動への接続度）と覚悟 K（同一化エネルギーの開通）の積 $\Phi = P \times K$ として表される。Φ は単に強度の大小を測る量ではなく、透という相への秩序変数であり、その臨界閾値の通過が相の転移として透を発動させる。

透が臨界に達したとき立ち上がる様式を、本稿は「界化」と名づける —— 個別主体としての規定を脱し、構造的領域（界）へと開かれて立つ様式であり、裸性・迫力・構造的開放化として現れ、その帰結として位相の共振（存在論的誘導）を生じる。強度は $\Phi = P \times K$ が、規模は主体の視座が規定する。透は形式的には、観測者関数 $V(Z) = \alpha D + \beta iD$ の理想極限 $V_{透}(Z) = Z$ として定式化される。

中心命題は、界化が自己の拡張ではなく、自己の純化の構造のもとに成立する、というものである。記述は終始実次元側からなされ、虚次元への直接的アクセスは主張しない。Φ や V(Z) の精密な経験的検証可能性、およびシリーズ全体の体系的展開は後続論文に委ねる。

Keywords: 透、界化、成る祈り、ä 演算子、純度、覚悟、第一衝動、同一化エネルギー、還流、相転移、観測者関数、存在論的誘導、自然体、無為自然、空、拡張虚数理論

目次 / Contents

01　序論
02　透とは何か
03　純度 P —— 第一衝動への接続
04　覚悟 K —— 同一化エネルギーの開通
05　透の発動条件としての成る祈り
06　透の発動
07　自然体・無為自然・空との分岐と拡張の二層
08　界化
09　既存枠組みとの関係
10　考察と限界
11　結論

01 序論

1.1 第二論文からの継承と本稿の位置

第一論文「拡張虚数理論：存在の二重構造としての Z = D + iD」（村主, 2026a）は、対象 X の存在の総体 Z(X) を、実次元成分 D(X) と虚次元成分 iD(X) の重ね合わせとして記述した。第二論文「『起こり』の構造論」（村主, 2026b）は、虚次元由来として事後的に記述される微細振動が認知空間上で気づきとして捕捉される出来事を「起こり」と呼び、その実次元側における成立構造を現象学的に記述した。

第二論文 §1.2は、「起こり」の上位概念として —— 個人の感情や思考の範囲を超え、自分を取り巻く構造そのものが動くという認識、すなわち「透」と呼びうる様式 —— の存在に言及し、深く立ち入らず別稿に委ねた。本稿はその別稿として、「透」の実存論的発動構造を主題化する。

1.2 中心的問い —— 「透」へ

「起こり」を断片的に経験することは、特殊な精神状態を必要としない。誰もが日常の中で経験する意識構造である。しかし、その「起こり」が個別の経験を超え、自分を取り巻く構造的場全体の動きとして経験される様式 —— 主体の操作によってではなく、環境・関係・状況全体の配置変化として、

言い換えれば自分が座する構造全体の側が動くものとして経験される様式 —— は稀である。これを本稿は「透」と呼ぶ。

言い換えれば —— 第二論文が記述したのは「起こりを捕捉する主体」であった。本稿が記述するのは「起こりの媒体となる主体」である。捕捉から媒体へ —— この主体の構造的反転こそ、本稿の中心的主張である（§2.2）。

中心的問いはこの透に向けられる。透は、いかなる実存的構造のもとに発動するか。すなわち、認知空間上の微細な「起こり」の捕捉が構造的場全体の動きの経験へと展開されるためには、主体の側にいかなる実存的条件が成立していなければならないか。本稿はこの発動条件として、二つの実存的変数の積として表される成る祈り $\Phi = P \times K$ の構造を析出する。「成る祈り」（becoming-prayer）は本稿が新たに導入する概念であり、§5で正式に規定される。

1.3 本論の射程と独自性

本稿が新たに展開するのは、透を主客分離が解消する地点で立ち上がる様式として捉え、その発動を実存的に記述する点である。西田幾多郎の純粋経験論、Heidegger の放下（Gelassenheit）、Eckhart の離脱（Abgeschiedenheit）、道家の無為 —— これらは本稿の対話相手であるが、本稿の課題はこれらを綜合することではなく、拡張虚数理論の枠組みにおいて構造記述として再定式化することにある。

1.4 方法論的注記

第一論文・第二論文と同様に、本稿は概念的枠組みの提案であり、数学的記法は構造的類比として用いられる。提示するのは仮説体系ではなく、ある実存的様式の構造的記述である。導入する形式装置（$\Phi = P \times K$、$V(Z) = \alpha D + \beta iD$）も虚次元への直接的アクセスを主張するものではなく、いずれも実次元側からの構造記述として置かれる。

中心命題（§2.3）は規範ではなく構造記述である ——「純化すべき」と命じるものではなく、「世界に通る力」も関係構造への接続性・同期可能性を指すにとどまり、引き寄せや超越論的因果の含意は伴わない。論述に反復する「世界」「世界の流れ」も便宜的呼称であり、主体が関与する関係構造の総体とその配置変化を指す。排除するのは「世界が固有の意思を持って動く」という形而上学的読みのみであって、配置変化そのものではない。

---

02 透とは何か

2.1 透という様式

本稿の主題は「透」である。透とは、主体が関係構造の変化を歪みなく媒介している様式 —— 第一衝動が干渉ノイズなく意識場を通過し、主体が作用の源ではなく経路として生起する在り方 —— を指す。

透は、何かを為すことではなく、ある特定の様式としてそこに在ることである。すなわち行為ではなく主体の在り方の様式である。本稿で「透の発動」と呼ぶのは、この様式への遷移 —— 主体が透という様式として立ち上がる出来事 —— を指す。「透という様式」と「その様式への遷移としての発動」の区別は、本稿全体を通じて維持される。

透を行為として理解すれば、「透として行為する」「透であるよう努力する」という自我的構造が再生産され、これは純度を低下させ、結果として透の様式は失われる。透は獲得目標としての行為ではなく、発動条件が満たされたときに自ずから生起する様式である。その発動条件は §5 で成る祈り $\Phi = P \times K$ として、形式的な定義と理想極限は §6 で与えられる。

2.2 起こりから透へ —— 主体の反転

第二論文の「起こり」は、虚次元由来の微細振動が認知空間において気づきとして**捕捉される離散的な出来事**であった。そこには、捕捉する主体と捕捉される起こりという分離が前提とされている —— 起こりは主体に「向こうから」訪れ、主体はそれを事後的に受け取る。

透とは、この分離が消える極限である。純度 P と覚悟 K が極まり主客分離が解消した地点（§5.4）では、主体はもはや個々の起こりを「捕まえる」のではない。主体自身が、起こりが絶え間なく自己生起する**媒体**となる。離散的に訪れていた起こりは、主体という場において連続的に生起する流れへと転じる。

この反転は、第二論文が構造上記述しえなかった事態である。第二論文は捕捉者と被捕捉物の分離を前提として「起こり」を定式化したのであり、その分離そのものの解消は、定義上その射程の外にあった。透はこの分離の解消を主題とする点で、起こりの続編ではなく、その**反転的完成**として位置づけられる。観測者と被観測対象のこの一致は、§6.3で観測者関数の理想極限 $V_{透}(Z) = Z$ として形式的に与えられる。

2.3 中心命題

本稿の中心命題は二層からなる。

> **第一命題** —— 主体は、起こりを捕捉する者から、起こりの媒体へと反転する。
> **第二命題** —— この反転は、自己の拡張ではなく、自己の純化によって成立する。

第一命題は本稿の主張の核であり、その構造は §2.2で示した。第二命題はその成立条件を述べ、§3以降で純度 P と覚悟 K として展開される。

この反転が場の規模にまで及んだ様式を、本稿は「世界として立つ」と呼ぶ —— 主体が自己中心的意図を介さず、関係構造の変化を媒介する構造的位置を指す（§8で「界化」として詳述する）。主体の偉大性・選別された地位・救済者性を意味するものではない。

なお本稿が「拡張」と呼ぶのは自己像・利害・他者への配慮の肥大化（純化で薄まる干渉ノイズ）であり、接続先の広がり（思考領域の拡張）とは別事象である —— この二層は §7.4で扱う。

2.4 なぜ拡張では届かないのか

自己を拡張するとは何を意味するか。論じる前に「自我」の構造的位置を整理する。

自我の構造的規定。 自我とは、ある人が人生の経験・記憶・解釈の中で蓄積し、相対的に安定した構造として固定化された総体である。外部刺激への反応パターン、自己像、利害計算、他者評価への配慮、過去への執着、未来への不安 —— これらの集合が、ある程度まとまった構成として保持された状態を指す。それは完成・終結した構造ではなく、人生の各時点における暫定的な姿に過ぎず、時間とともに更新されうる。

自我は、それ自体「悪い」ものではない。社会的・実存的な安定を支える機能を持つ。ただし、自我は安定構造であるがゆえに、内側から自発的に立ち上がる固有の駆動性（§3.3で規定する「第一衝動」）に対しては、しばしば干渉ノイズとして作用する。

自己の拡張とは、本稿の枠組みのもとでは、この自我の肥大化を指す。自己像の拡張、利害計算の拡張、他者評価への配慮の拡張 —— より広範な領域を覆っていく方向の運動である。

自己を拡張すると、その分だけ干渉ノイズが増す。ここで「干渉ノイズ」とは、立ち上がりが固有の形を取る前にそれを既存の枠に押し込もうとする働きの総称であり、獲得欲、回避欲、自動的解釈、自己評価への執着、他者の意見の取り込み、さらには「他者がいる」という認知それ自体への過剰な囚われまでを含む（第二論文 §4.1 (ii)と同一の構造）。肥大化した自我は、世界との接触面において、固有の形ではなく既存の枠を通した形を提示する —— すなわち固有の駆動性ではなく自我的構造物の連鎖を提示する。

2.5 なぜ純化で届くのか

世界との関係構造を媒介しうる構造は、主体が世界の流れを通過させる構造として記述される。主体は作用の源ではなく、関係構造の変化を媒介する経路として位置づけられる。

自己が干渉ノイズで飽和していれば、世界の流れは主体において歪む。干渉ノイズが薄まれば、世界の流れは歪まずに通過する。これは因果論的命題ではなく構造記述的命題である —— 純化された自己は世界の流れとの接続点として記述され、その接続点において主体は関係構造の変化を媒介する位置を占める。主体は作用の起点ではなく経路として機能する。

この構造を、本稿は純度 P と覚悟 K の二変数として形式化する。

---

03 純度 P —— 第一衝動への接続

3.1 純度の構造

Definition 1（純度 P） 意識場における干渉ノイズの相対的不在度。0 から 1 の連続値として概念化しうる —— P = 1 は干渉ノイズが完全に不在の状態、P = 0 は意識場が干渉ノイズで完全に飽和した状態。

この概念は第二論文 §4.1 (ii)の「純度」と同一の構造を持つ。本稿はこれを透発動の必要条件として位置づけ直すと同時に、その内実を「第一衝動への接続度」として深化させる。

純度は意識の「明晰さ」「集中度」「覚醒度」とは別概念である。極度に集中していても干渉ノイズが高い状態（競争心・達成欲・自己評価への執着の強い集中）はある。逆に、明晰さがやや低くとも干渉ノイズが不在の状態もある。

3.2 純度は動的に維持される

純度は達成して固定される状態ではなく、動的に維持されるものである。意識場は時間的構造を持ち、各瞬間において外部刺激・内部記憶・未来予期から干渉ノイズが再生成される傾向を持つ。したがって、純度は瞬間ごとに能動的に維持されねばならない。

形式的には純度は時間関数 P(t) として表記される。透発動の必要条件は、ある時間区間 [t0, t1] において P(t) が一定の閾値を超え続けることである。これは静的状態の達成ではなく、瞬間ごとに更新される構えとしての性格を持つ。

3.3 第一衝動 —— 純度の内実

Definition 2（第一衝動） 各人の生の深層において反復的に立ち上がる固有の駆動性。外部からの情報・刺激・条件に応じて生起する反応ではなく、主体の内側から自発的に立ち上がる動的構造である。本稿はこれを、その人に固有の振動・固有のベクトルとして概念化する。本稿が分析対象とするのは、このうち関係構造への接続を生成する方向の駆動である（§3.4）。

第一衝動は静的な「核」や「本質」ではなく、生のさまざまな局面で繰り返し立ち現れる固有の駆動パターンを指す。純度とは、静けさではなく接続である —— 第一衝動への接続が干渉ノイズなく開通している度合いを指す。

3.4 第一衝動の方向性

人間の内側に立ち上がる動的駆動は、構造的に二つの方向に分かれる —— 関係構造へと接続を生成し開いていく方向と、内へ閉じ・崩し・退いていく方向（自己への退却、他者への破壊、関係構造からの撤退）である。本稿が「第一衝動」と呼ぶのは前者だけである。基準は生成的性格にある ——「接続を生成する駆動であるがゆえに、結果として関係構造へと開かれる」という順序であって、本源的・基底的な層を主張するものではない。

したがって自己破壊・他者破壊・関係構造からの撤退は、本稿が「第一衝動」と呼ぶ範囲に含まれない。これは価値判定ではなく、分析対象の限定である —— 破壊的・自己収縮的な駆動が存在しないとも劣るとも主張しない。本稿が透・界化の発動を主題とする以上、関係構造への接続を生成する駆動だけが分析の射程に入る、という限定にすぎない。この限定のもとで「自己の純化が世界に通る力を最大化する」と言いうるのは、扱う駆動性が純化された自己において干渉ノイズなく通過するからである。なお本稿において「第一衝動」という語は時間的先行性を意味しない。透・界化の成立を分析対象とするため、生成的接続をもたらす駆動に限定して用いる作業上の名称である。

3.5 純度に収まるもの —— 誠・無私・透

純度 P という一語に、伝統的に異なる呼称で扱われてきた複数の構造が収まる。以下の三語は、本稿の枠組みのもとでは純度 P の構造的側面を指す参照語として用いられ、これら諸語が伝統的に伴ってきた宗教的・道徳的・形而上学的含意は保持されない。

- **誠** —— 第一衝動への接続が行為と言葉を貫いた現れ、すなわち意識の内側の接続が外的な行為と言葉の整合として顕れた事態を指す参照語。
- **無私** —— 源泉が「私」以前にあるという事態、すなわち第一衝動が「私の」運動ではなく「私を通じて働く」運動であることが見えた事態を指す参照語。
- **透** —— 本稿の中心概念。第一衝動がそのまま通過している様式であり、純度 P が極大化された様式の名称（純度の側面に注目した呼称であり、覚悟 K を含む完全な規定は §6 で与える）。

三者は別個の概念ではなく、純度の構造的側面の異なる現れを指す参照語の体系である。本稿はこの統合を、透の発動条件の一部として再定式化する。

3.6 純度と「真我」—— 参照型としての位置づけと構造的差異

第一衝動が干渉ノイズなく意識場を通過している状態は、古来「真我」と呼ばれてきたものに構造的に対応する側面を持つ。本稿は「真我」を実体として規定せず、純度が極大化された際の意識場の構造を指す参照語として用いる。

「真我」「本来の面目」「内なる神性」「Seelengrund」「アートマン」—— これらが指してきた構造を、本稿の枠組みは純度 P が極大化された際に前景化する同じ構造的位置として読む。ただしそれを実在する核として立てることはしない。「真我」を実在物として立てる操作それ自体が自我的操作であり、純度 P を低下させるからである（禅の「仏に逢うては仏を殺せ」と構造的に同型）。

そして「第一衝動」と古典的な「真我」は、決定的に異なる。真我が時間にも経験にも左右されない不変の核として立てられるのに対し、第一衝動は §3.3の規定どおり動的な駆動構造であり、時間とともに姿を変える。真我が「不変の核」であるのに対し、第一衝動は「変化しつづける固有の駆動」である。本稿が「真我」をそのまま中心概念として採用しえないのはこの一点による —— 純度 P が指すのは、静止した「真我」ではなく、固有の動的駆動が干渉ノイズなく通過している状態である。

---

04 覚悟 K —— 同一化エネルギーの開通

4.1 覚悟の構造

純度 P のみでは透は発動しない。もう一つの実存的変数 —— 覚悟 K —— が要請される。

Definition 3（覚悟 K） 第一衝動に生を懸ける強度。構造的には、自己保存条件を後景化する強度として位置づけられる。関心、真剣、人生を賭ける、命を懸ける —— 覚悟には段階がある。自己の存続を条件から外したとき、K は極限に達する。P と同様に 0 から 1 の連続値として概念化しうる —— K = 1 は自己保存条件が完全に後景化した極限、K = 0 はそれが前景を占める状態。

覚悟は純度を支える構造的条件である。純度の維持は痛みを伴う作業であり、自我的構造物（獲得欲・回避欲・自動的解釈・自己評価への執着）を手放すことは心理的・実存的痛みを伴う。この痛みに耐える理由は、覚悟からしか供給されない。

4.2 覚悟が純度の天井を決める

ゆえに、純化の痛みに耐える理由は覚悟からしか供給されないため、覚悟が深まればより高い純度を維持しうるが、浅ければある段階で止まる。

すなわち、純度の到達可能な上限は覚悟 K に依存する —— 覚悟が深いほど、維持しうる純度の上限は高い。これは量的に予測される関係ではなく、純度の上限が覚悟によって規定されるという構造的事実を述べたものである。

覚悟が浅い段階に留まる主体は、ある純度以上には構造的に到達しにくい。これは道徳的判定ではなく、上記の依存関係の構造的帰結である。なお、純度の上限には視座も結合的に作用するが、その構造は §5.5で別途扱う。

4.3 同一化エネルギー

覚悟 K のもう一つの側面を、本稿は「世界の流れとの同一化エネルギー」として規定する。

通常、意識を分析する際は、主体（意識する者）と客体（意識される対象）を区別し、その間に志向性の関係を立てる。Husserl に代表される現象学の基本図式である（Husserl, 1913）。しかし純度 P が高まる過程で、この主客図式そのものが変容する。自我的構造物は「主体としての自己」を構

成する主たる要素であり —— 自我こそが、世界から何かを獲得しようとする「主体」を立ち上げる —— 自我が薄まれば、それに比例して「客体に対して立つ主体」もまた薄まる。

ここで生じるのは、志向性が背景退却し、別の構造が前景化する事態である。西田幾多郎が『善の研究』において「純粋経験」と呼んだもの（西田, 1911）—— 主客未分の経験 —— は、まさにこの事態を指している。本稿はこれを覚悟 K の構造的・形式的な側面として位置づける。

4.4 共振としての構造

「同一化エネルギーの開通」とは構造的にどのような事態か。本稿はこれを**共振**として規定する。

共振とは、二者が区別を保ちながら同期して振動する状態を指す。意識は依然として個別的でありながら、世界の流れと位相を一致させる —— 独立性は保持されつつ、リズムが揃う。意識は世界の流れを外から観察するのでも、それに飲み込まれるのでもなく、同じ位相で生起する。これが「同一化エネルギーの開通」の意味である。

この共振が成立し意識と世界の流れが同位相で循環する事態を、本稿は以下「還流」（kanryū; circulation）とも呼ぶ —— 新たに導入する併記語である。「同一化エネルギーの開通」を構造記述上の規定として、「還流」を経験記述上の呼称として用い、両者は同一の事態を指す。

なお同一化は、二者が単一体となる「融合」や一方が吸収される「消滅」とは異なる。融合・消滅を目指す諸伝統（一部の神秘主義、エクスタシス的体験の追求）が個別主体の解消を要求するのに対し、本稿の共振は個別主体の保持を前提とする —— 区別を保ったまま位相が揃う。

4.5 覚悟の自己消尽

覚悟は、主体を立てたまま固定する構えではない。むしろ、覚悟が問われる決断を一つ越えるたびに、主体は薄まっていく。祈っているうちは、まだ祈る主体がいる —— だが自己保存の条件が一つずつ外れていくにつれて、その主体は痩せていく。覚悟が深まるとは、覚悟する当の主体が消えていくことにほかならない。

透に近づく頃には、もはや覚悟すべき主体も、覚悟という構え自体も要らない。すなわち覚悟とは、極限において覚悟する主体そのものを消尽する運動 —— 自己消尽 —— であり、その消尽の果てに透が立ち上がる。この帰結は §5.4の「願えない」構造として再記述される。

---

05 透の発動条件としての成る祈り

5.1 願う祈り（wish-prayer）

ここで祈りの二つの様態を区別する。

Definition 4（願う祈り wish-prayer） 主体が客体（神・世界・未来）に対して、ある状態の実現を要請する祈り。主体・客体・願われる内容の三項分離を前提とする。

願う祈りには三つの構成要素がある —— (1) 願う主体（祈り手）、(2) 願われる客体（神・世界・未来）、(3) 願われる内容（欲望される状態）—— そしてこれら三者の間に分離が前提とされている。願う主体は「願われる内容」を未だ持たないからこそ願う。この欠如が願いの動因である。

5.2 成る祈り（becoming-prayer）

Definition 5（成る祈り becoming-prayer） 主体が世界の流れと同位相となることによって、ある状態を生成する祈り。主体・客体・内容の三項分離が解消し、主体が通路として生起する。

成る祈りには願う祈りの三項構造がない。あるのは、世界の流れと同位相となった主体の生起そのもののみである。「願われる内容」は外部に置かれた目標ではなく、主体の生起様態そのものに既に内包されている。成る祈りは、何かを未来において獲得しようとする祈りではなく、現在の生起そのものが祈りである、という構造を持つ。

祈る者は、送信者ではなく通路である —— この一言が成る祈りの構造を凝縮している。

なお、願う祈りと成る祈りは相互排他的な二者ではなく、一つの連続体の両極である。両者を分かつ $P \times K$ は連続値であり、祈りはその値に応じて願う祈りの極から成る祈りの極へと連続的に移行する。現実の祈りの多くはその中間にあり、願いながら成りつつあり、成りながらなお願いを残している。両者を別の名で呼ぶのは、連続体の両端を概念的に際立たせるためであって、離散的な二分法を立てるためではない。

5.3 核の式 —— $\Phi = P \times K$

成る祈りの強度を、本稿は次のように形式化する。

> $\Phi = P \times K$

ここで Φ は時刻 t における成る祈りの強度、P は純度（§3）、K は覚悟＝同一化エネルギー（§4）である。P・K・Φ はいずれも時間関数 $P(t)$、$K(t)$、$\Phi(t)$ として扱われるが、文脈から明らかな場合は t を省略する。

積として定義されることには次の含意がある。いずれか一方がゼロであれば、成る祈りは成立しない。$P = 0$（自我的雑音で飽和）ならば、いかに K が高くても、その共振は「願う祈り」へ後退する —— 主体が自我的に世界と接触するため、接触は願望の媒体となる。逆に $K = 0$（世界との結合が無）ならば、いかに P が高くても、その純度は「孤立した純粋」に留まり世界に作用しない —— 閉じた瞑想状態に止まる。

ゆえに成る祈りは純度 P と覚悟 K の両方を要請する乗法的構造を持つ。両者は互いに代替不能であり、一方の高さが他方の低さを補わない —— 加法ではなく乗法を採るのはこのためで、一方が 0 ならば積も 0 となる。成る祈りは妥協を許さない。

さらに本稿は、Φ を単に祈りの大小を測る強度としてではなく、透という相への発動を支配する**秩序変数**として位置づける。Φ の増大は、ある臨界閾値において、量的な強まりとしてではなく相の転移 —— 透の発動 —— として現れる。この相転移的性格は §6で詳述する。

5.4 主体が落ちる地点 —— 「願えない」構造

覚悟 K が極限に達したとき、自己の存続は条件から外れている。つまり、祈る主体としての「私」も、その地点で条件から外れている。主体が外れた地点で起きている運動は、もはや主体の行為ではない。祈りは自動詞化し、「成る」としか呼べない運動になる。

これは抑制ではなく構造的不可能性である。願う行為には、主体と客体の分離、現在と未来の分離、所有と非所有の分離 —— 一切の分離が前提とされる。Φ = P × K が極大化された状態において、これらの分離は薄まる。ここに「ある状態を将来において獲得しようとする」志向性は構造的に立ち上がりようがない。

ゆえに成る祈りは「願わないことを選ぶ」のではなく、「願えない」のである。これは主体の欠如ではなく、本稿の定義域においては、Φ = P × K が極大化された状態における主客分離の構造的解消として位置づけられる。

5.5 視座が決めるもの —— 成る祈りの規模と方向性、純度との結合

Φ = P × K は祈りが成立する**強度**の構造を記述する。しかしこの定式は、その祈りが**何として立ち上がるか**—— どのような規模・方向性で生起するか —— については何も語っていない。

§5.4のとおり Φ が極大化された状態では、祈る主体としての意思は条件から外れている。では成る祈りの規模・方向性は、何によって決まるのか。

視座の規定 —— 認知次元空間における座標軸。 本稿は、祈りの規模・方向性を規定するものを**視座**として位置づける。視座とは、主体の認知次元空間（第一論文 Definition 5, C(S, t)）において開かれている**座標軸の集合** —— どの方向にどれだけ軸を開いているか、どの構造的領域を分節可能な座標として保持しているか —— を指し、主体が世界のどこを「見うる」「分節しうる」「接続しうる」かを規定する。

視座が狭いとは、開かれている座標軸が少ない、あるいは短いことを、視座が広いとは、より多くの座標軸がより広い領域にわたって開かれていることを意味する。ある場所のみに接続する主体はその場所を分節する座標軸のみを、家族の領域に接続する主体は家族関係を分節する座標軸を、世界の構造全体に接続する主体は世界規模の構造を分節する座標軸を開いている。視座の広狭とは、この座標系の射程の差を指す。

視座が成る祈りの規模を決める。 成る祈りは主体の視座という座標系の上で生起する。視座が狭い主体の成る祈りはその狭い座標系に対応する規模で、視座が広い主体の成る祈りはその広い座標系に対応する規模で立ち上がる。Φ が同じ強度であっても、視座の広さが異なれば、立ち上がる規模は構造的に異なる。

視座と純度 P の構造的結合 —— ジレンマの構造。 視座と純度 P は互いに独立した変数ではなく、構造的に結合している。視座が狭いとき、認知次元空間は限定された座標系に閉じており、その内部での自己保存・自己拡大が主要な関心となり、結果として自我的構造物（自己像・利害計算・他者評価への配慮）が強く前景化する傾向がある。すなわち、視座が狭いと自我強度が高まりやすく、純度 P を低下させる方向に作用する。逆に視座が広いとき、認知次元空間はより広範な座標系に開かれ、特定の自我的構造物に固執する圧力が相対的に弱まり、純度 P の上限を高める方向に作用しうる。

つまり視座は、「祈りが何として立ち上がるか」を規定するだけでなく、純度 P の到達可能な上限にも結合的に影響する。視座が狭いと純度 P の上限が下がり、結果として Φ の強度も上限を持つ —— 視座が狭いまま強度を高めようとしても、構造的にある段階で頭打ちになる。これが本稿の指摘する**ジレンマ構造**である。視座が狭いと、世界と共振しうる範囲そのものが構造的に制約される。

この結合関係を整理すれば、成る祈りの全体構造は二つの相互結合した構造軸によって規定される。

- **Φ = P × K** —— 祈りの**強度**（§5.3）
- **視座** —— 祈りの**規模・方向性**、および P の上限の規定（本節）

両者は独立な軸として並列するのではなく、視座が P の上限を構造的に規定する形で結合している。

視座の形式化は別論文の主題。 視座を Φ の関数として直接組み込むこと（Φ = f(P, K, 視座)）は本稿では行わない。視座は強度に加算的に寄与するのではなく純度 P の上限を規定する結合関係であり、その形式的記述 —— 観測者関数の係数 α・β との関係を含む —— は独立の主題だからである。

ただし本稿で確立されたのは次の二点である。(i) 主体の意思が後退した先の成る祈りにおいて、なお祈りの規模・方向性を規定するものが残っており、それは視座である。(ii) 視座は純度 P の上限を構造的に規定し、視座が狭ければ純度に上限が課される。この二点により、中心命題（§2.3）—— 「世界として立つ」様式が自己の純化の構造のもとに成立する —— は、強度の純化（P × K）と規模の純化（視座）の二重の構造的要請を伴うものとして、より精密に位置づけられる。

第二論文の「精度」との区別。 両論文は純度・視座を共有するが、第二論文 §4.1 が整理した「起こりの捕捉精度」は覚悟 K を含まない**認知論的**概念であり、本稿の「祈り」は K を中心要素とする**実存論的**概念である。両者は同じ主体の異なる局面 —— 認知論的局面（起こりの捕捉）と実存論的局面（透への発動）—— であって、一方から他方を定式上導くことはできない。

成る祈りの全体像は、この二軸に収斂する —— どれだけ深く世界と共振しているか（強度 Φ = P × K）と、どの構造的範囲に接続しているか（規模・視座）である。本稿の中心命題が指す

「世界に通る力」は、純度の深さのみならず、視座という規模との結合において成立する。そして視座が界の規模にまで開かれたとき、透は界化として立つ（§8）。

---

06 透の発動

6.1 透の規定

§2で導入した透を、成る祈りの定式のうえで形式的に規定する。

Definition 6（透 Tōh） 主体が関係構造の変化を歪みなく媒介している様式。本稿の枠組みでは、第一衝動が干渉ノイズなく意識場を通過し、成る祈り $\Phi = P \times K$ が臨界閾値を超えた地点で立ち上がる主体の在り方として位置づけられる。

6.2 発動条件 —— 相の転移として

ある主体 S において、時間区間 $[t0, t1]$ にわたって $\Phi(t) = P(t) \times K(t)$ が一定の臨界閾値を超え続けるとき、その区間において透が発動する。この閾値は P と K の積として表現されるため、純度 P と覚悟 K のいずれかが極端に低ければ達成不可能である、という点は形式的に保証される。

この発動は、強度が滑らかに増していった果ての到達としてではなく、臨界閾値の通過に伴う**相の転移**として記述される。Φ は透という相への秩序変数であり、その値が臨界点を超えると、主体は連続的な強度の増大としてではなく、非線形的な相転移として透へ移行する。物理的同期現象において結合強度が臨界値を超えると系が一斉に位相同期へ移ること（§8.4の Huygens・Strogatz の同期はその例である）と、構造的に同型の事態である。

この条件は §5の成る祈りの定式と完全に対応する。成る祈りが成立しているとき、かつそのときに限り、透は発動する。中心命題 —— 純化が世界に通る力を最大化する —— の構造的根拠は、この発動条件の構造に集約される。

6.3 観測者関数 V(Z) と透の理想極限

本節は透状態を構造記述上で形式的に位置づける。第一論文が定式化した存在 $Z = D + iD$ を観測の側から記述するため、本稿は観測者関数を導入し、その用途を透の理想極限の記述に限定する。これは「実次元・虚次元の純度」を論じる作業ではなく、透という主体の在り方を形式的構造として表現する作業である。

任意の意識主体 S が存在 $Z = D + iD$ を観測する際、その観測は次のように表記しうる。

> $V(Z) = \alpha D + \beta iD$

ここで α・β はそれぞれ実次元 D 成分・虚次元 iD 成分に対する S の感受性係数である。一般的な観測は常に「歪み」を伴う。

透状態は、この V(Z) における理想極限ケースとして定式化しうる。すなわち透とは、V(Z) が Z 全体を歪みなく反映する漸近的目標であり、形式的には α = β = 1 であり、位相同期（その内実は §8.4 の共振として展開する）が成立している状態である。

> V透(Z) = D + iD = Z （理想極限モデル）

これは経験的に完全達成されうるとして主張するものではなく、実存的実践においては漸近的目標として機能する。本稿で「透状態」と呼ぶのは、この理想極限への接近度が十分に高い領域を指す。

V(Z) = Z は観測者と被観測対象の同一性を意味するのではなく、観測者が被観測対象を歪みなく反映する状態を意味する。鏡が対象を歪みなく映すように、透状態にある主体は世界の流れを歪みなく映す。

本稿で論じた透の発動構造は、シリーズ全体の枠組みにおいて「ä 演算子」として体系化される予定である。五演算子（ä, ï, ü, ë, ö）の体系的展開は後続論文「母韻演算子論」の主題となるため、本論内では「透」概念のみを主題として進める。

---

07 自然体・無為自然・空との分岐と拡張の二層

本稿の「透」は、東洋思想の自然体・無為自然・空と響き合いつつ、それぞれと分岐する。

7.1 自然体の射程

自然体とは、自我的構造物が前景化せず、主体が場と直接接している状態を指す。しかしそのとき主体は必ず何かに接続しており、その接続先がその人の思考領域である。ゆえに自然体の射程は思考領域の広さで決まる —— その場に閉じた者の自然体はその場の大きさに、世界を知った者の自然体は世界の大きさで立つ。純化は雑音の除去であると同時に接続先の規定でもあり、何に接続するかが透の射程を決める（§7.4）。

7.2 無為自然との対比

無為自然は老荘思想の中心概念である —— 作為を手放せば天地の理がおのずから流れ、万物はそうあるべく成る。人は源ではなく経路という感覚は本稿と重なるが、無為自然は場の思想として向き・覚悟・規模の差を持たない。成る祈りはそこに向きと覚悟（第一衝動の方向と K）、そして視座という規模軸（§5.5）を入れる —— この三点で透は無為自然と分岐する。

7.3 仏教の空との分岐

空（śūnyatā）は中観・唯識・華厳・禅など成熟した伝統を持つが、本節が分岐するのはその**通俗的理解** —— 空を「離脱」「世間からの撤退」と結ぶ読み —— との間においてである。成る祈りの透はその「引き算」とは逆に、第一衝動の通過自体が関係構造へと開かれ、主体は世間に深く関与する（自我的にではなく第一衝動の通路として）。自我的構造物を薄めることは「無我」に通じて見えるが、薄めるのは自我的構造物であって個別主体性ではなく、本稿は個を解消する無我の立場は取らない。哲学的に成熟した空理解とは敵対せず、それが「空の実体化」を排して開く場面を透が名指す関係にある。

7.4 拡張の二層 —— 表層の拡張 vs 思考領域の拡張

拡張と純化は対立ではなく、層が違う。

- **表層の拡張** —— 自己像・利害・他者への配慮の肥大化。これは雑音となり、純化で捨てる。
- **思考領域の拡張** —— 世界認識の広がり。これは接続先を広げ、射程が伸びる。

純化すべきは前者、広げるべきは後者。ゆえに純化は単なる引き算ではなく、雑音を落としつつ接続先を広げる二重の運動である。純化された自己は表層では小さくなるが、思考領域では世界の大きさへと拡張する —— この二重の運動によって、透は世界の大きさで立ち現れる。

---

08 界化

透が臨界に達したとき —— 純度 P と覚悟 K が高まり、$\Phi = P \times K$ が臨界閾値を超えたとき —— 主体はある統合的な様式として立ち上がる。本稿はこれを「界化」と名づける —— 個別主体としての規定を脱し、構造的領域（界）へと開かれて立つ様式である。「世界として立つ」（§2.3）はその平易な言い換えであり、主体が文字通り世界そのものになることを意味しない。界化は特権的地位や精神的優越を意味するものでもなく、§8.2で見るとおり、むしろ自我が薄まる構造を指す。

本章は界化を構造記述する。界化はまず透との関係において規定され（§8.1）、三つの契機において現れ（§8.2）、その帰結として存在論的誘導を生じる（§8.3・§8.4）。最後に、界化をシリーズ全体のなかに位置づける（§8.5）。

8.1 界化の構造 —— 透から界化へ

界化は、透とは別の様式ではない。透が一定の規模に開かれたときの相である。§5.5で見たとおり、透の規模は主体の視座 —— 開かれている座標軸の射程 —— によって決まる。視座が一つの場に閉じていれば、透はその場のなかで局所的に立つにとどまる。視座が構造的領域の全体へ開かれているとき、同じ透がその領域の規模で立つ。この後者を、本稿は界化と呼ぶ —— 界化とは、界の規模に開かれた透である。

ここで「界」とは、主体がそのなかに座する関係構造の総体 —— 個別の対象でも特定の他者でもなく、主体を含んで広がる構造的領域そのもの —— を指す。仏教が法界（dharmadhātu）の語で名指してきた、個物に先立つ構造的な場と、構造的に響き合う位置にある。ただし本稿は界を実体として立てず、純化された主体が接続し分節しうる構造的領域として位置づける。

界化において、§2.2で述べた主体の反転は最大の規模に達する。局所的な透では、主体は個々の起こりが自己生起する媒体となる。界化では、主体は界そのものが自己生起する媒体となる —— 個別主体としての輪郭が背景へ退き、界の側の運動が主体を通って前景化する。界化が「個別主体としての規定を脱し、構造的領域へと開かれて立つ」と言われるのは、この意味においてである。

透とは、§2.3で見たとおり、主体が起こりの媒体となることである。界化はその媒体化が界の規模へ拡張した様式 —— すなわち、界そのものの媒体となることにほかならない。一言で言えば、界化とは —— 個として立つことをやめ、界として立つことである。為す主体が背景へ退き、界の側の運動が主体を通って生起する —— 行為はあるが、行為者はいない。これは無力でも受動でもなく、個という抵抗が消えたぶん、界の運動が最も歪みなく通る状態である。

8.2 界化の三契機 —— 裸性・迫力・構造的開放化

界化は、本稿の枠組みのもとで三つの構造的契機において現れる。これらは、$\Phi = P \times K$ が臨界を超えた場合に界化に構造的に伴う契機である。

裸性 —— 自我的構造物の薄まりによる、世界との接触面における構造的露呈である。この状態において、§2.4で規定した自我（暫定的な安定構造）は薄まり、主体と世界の接触面は自我的構造物を介さない直接的なものとなる。「裸性」と呼ぶのは、覆いとなる構造物が薄まっているという構造的特徴を示すためである。

裸性は外から次のように現れる。その主体の言葉と行為は状況に対して過不足なく即応し、自己像を守るための留保や演出が薄いため、応答に「ため」や「飾り」が少ない。守るべき自我的構造物が前景化していないため、防御的反応も乏しく、しばしば率直さや無防備さとして経験される。ここで誤解が生じやすい —— 裸性は「素直な性格」や「裏表のなさ」という性格特性ではなく、自我的構造物が薄まった構造的状態の現れである。性格として裸なのではなく、構造として覆いが薄いのである。

迫力（対峙の場における集中の質の変化） —— 第一衝動の通過の構造的厚みが、対峙の場において前景化する様式である。第一衝動が主体を経路として通過しているとき、対峙する側の意識場においては、その通過が自我的構造物を介さない「圧」として経験されうる —— より構造記述的に言えば、対峙の場における集中の質が変化する。「迫力」と呼ぶのは、自我的構造物を介さない第一衝動の構造的厚みが対峙の場で前景化することを指すためであり、特定のカリスマ性や心理的・神秘的体験の主張ではない。

なぜ迫力が生じるかは構造的に説明できる。対峙する側の意識場は通常、相手の自我的構造物（自己像・意図・防御）を読み取り、それに合わせて応答を構成する。しかし界化した主体にはその読み取るべき自我的構造物が薄い —— 読み取り先が透けているため、対峙する側は通常の調整先を失い、相

手の第一衝動の厚みに直接さらされる。これが「圧」として経験される。ゆえにこの場合の迫力はカリスマとも威圧とも構造を異にする。カリスマは魅力的な自己像の投影であり、威圧は脅威の表示であって、いずれも読み取るべき自我的構造物を相手に提示する。迫力はその逆に、提示すべき自我的構造物が薄いことから生じる —— カリスマと威圧が「強い自我の効果」であるのに対し、本稿のいう迫力は「自我の希薄さの効果」である。

構造的開放化（非個体化） —— 個別主体としての規定が薄まり、第一衝動の構造的経路として機能する様式である。この状態において、主体は「個別主体としての規定」と「第一衝動の構造的経路としての規定」の重層構造を持ち、後者が前景化する。すなわち、主体が文字通り「世界になる」のではなく、個別主体としての規定が薄まり、より広い構造的経路として開かれる事態を指す。

この契機は、界化した主体を指導者・宗教家・起業家としばしば混同させる —— いずれも「個を超えた何か」を体現するように見えるためである。しかし構造は逆である。指導者は意志をもって集団を方向づけ、宗教家は超越的権威を媒介し、起業家は構想を事業として打ち出す —— いずれも個別主体としての規定を保ったまま、その規定を通じて働きかける。界化はそうではない。個別主体としての規定そのものが背景へ退き、第一衝動が特定の個人に帰属しない構造的経路として通る。指導者・宗教家・起業家が「強い個を通じて超個的に働く」のに対し、界化は「個の規定が薄れることで構造的に開かれる」。外見が似て、構造が反対なのである。

三つは別個の現象ではなく、界化という一つの様式が示す三つの契機である —— 自我的構造物が薄まる裸性、第一衝動の厚みが対峙の場で前景化する迫力、個別規定を脱して構造的経路へ開かれる構造的開放化。界化はこの三契機の統合として立つ。

8.3 界化の帰結 —— 存在論的誘導

界化した主体が世界に及ぼす影響は、直観的には「世界を導く」働きとして理解されやすい。しかし本稿の枠組みでは、界化が世界に及ぼすのは「導き」ではなく、世界に共振を生じさせることとして記述される。

ただし本節で、本稿はこれまでの主体内部の構造記述から、他者・世界への波及の記述へと一歩を進める。この一歩には、あらかじめ厳密な限定を付す —— **本稿は存在論的誘導の実在も因果的効力も主張しない**。 存在論的誘導は、界化という様式を仮定したときに理論内部で構造的に導かれる帰結であって、その経験的発生を予測・立証するものではない。本節の記述はすべて、この理論内部的・条件的な位置づけのもとで読まれる。

その前提のうえで、「導く」という語に混在する二つの構造を分けておく。

- **意志的誘導** —— 主体が意志をもって、他者・世界に対して特定の方向への変化を働きかける構造。
- **存在論的誘導** —— 主体がある様式であることそのものによって、他者・世界の位相に共振を生じさせる構造。

日常的に「導く」と言うとき、人が想起するのは前者である。指導者・起業家・政治家はその典型であり、彼らは何かを為し、語り、示すことによって他者を特定の方向へ動かそうとする。

しかし界化した主体の場合、本稿の枠組みのもとでは異なる構造が記述される。界化した主体は、何かをしようと意図する自我的構造物が薄まっている。にもかかわらず、その様式が世界の流れと位相的に同期する。共振は伝播する —— この伝播が「存在論的誘導」として構造記述される。

歴史上、深い影響を遺した人物のうちには、何を「為した」かよりも何で「あった」かが影響構造の中核を占めると読みうる事例が存在する。これらの影響史は、意志的誘導モデルでは完全には捉えきれない側面を持つ。存在論的誘導の概念は、そうした側面を構造的に名指す試みである。本概念は既存の理論を否定するものではなく、カリスマ研究や模倣理論が扱いにくい「何を為したかよりも何で『あった』かが影響構造の中心を占める事例」を記述するための補助概念として導入される。具体的な歴史的人物への適用は本稿の射程外であり、別途の構造分析の課題とする。

8.4 因果から共振へ

意志的誘導の論理は因果論的である。A が為したことが B にある結果を引き起こす。原因と結果の間には時間的順序があり、両者は明確に分離されている。

存在論的誘導の論理は共振論的である。A の様式は B の様式と直接に同期する。両者の間には力学的な作用因として位置づけられるものはなく、あるのは位相の一致のみである。

物理学において、結合された二つの振動子は互いの位相を引き寄せ合う。これを同期現象と言い、Huygens が 17 世紀に二つの振り子時計の同期を観察したのが嚆矢である（Huygens, 1665）。生物学では、ホタルの同期発光、ペースメーカー細胞群の同期、概日リズムの社会的同期がいずれも同様の構造を示す（Strogatz, 2003）。

存在論的誘導は、社会科学・認知科学で確立された同期モデル群と構造的に類比的である —— 情動感染（Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1994）、相互行為儀礼（Collins, 2004）、entrainment（Clayton, Sager, & Will, 2005）はいずれも、人間の意識場間に位相的同期構造が成立しうることを、それぞれの方法論において実証的に示している。

透状態にある主体は、本稿の構造記述上、世界の流れと位相を一致させている。この主体が複数の他者と意識場を共有するとき、他者の意識場もまた徐々にその位相へ近づく —— 因果ではなく位相結合の構造である。本稿は、情動感染・相互行為儀礼・entrainment、および Huygens 効果や生物学的同期が示す同期構造を、意識場の位相結合へと拡張する。

ただし「存在論的誘導」は、文学的比喩でも形而上学的全称命題でもなく、これら同期研究と構造的に類比的なモデルとして提示される —— 類比であって直接的証拠ではない。とりわけ、存在論的誘導は特別な能力やオーラの仮説ではなく、人間の意識場に成立する同期構造を実存論的に記述するための名称である。意識場の「位相」概念の形式化と経験的検証は、将来の課題に属する。

8.5 界化の理論的位置 —— 社会的位相として

界化を、シリーズ全体のなかに位置づけておく。第二論文が記述した「起こり」は、認知空間における捕捉の構造 —— すなわち**認知論**のレベルにある。本稿が記述した「透」は、主体がその捕捉の媒体となる構造 —— **実存論**のレベルにある。そして界化は、その実存的様式が場の規模で立ち現れる構造 —— **社会的位相**のレベルにある。同じ拡張虚数理論の枠組みが、認知・実存・社会的位相という三つのレベルにわたって分節される。

界化が社会的位相のレベルにあるとは、存在論的誘導がどの規模で生じるかが主体の視座（§5.5）によって定まる、ということである。視座が親密圏に開かれていれば位相結合は親密圏で、構造的領域の全体に開かれていれば界の規模で生じる。ただし本稿はこの位相を構造として位置づけるにとどめ、特定の人物・役割・事例への帰属は行わない —— 具体的な社会的分析は、それ自体が別個の主題である。

---

09 既存枠組みとの関係

本稿は複数の哲学的伝統と構造的に響き合う。これらの接続は構造的類比であり、各伝統との完全な同一性を主張するものではない。

9.1 Heidegger の Gelassenheit

Heidegger 後期の Gelassenheit（放下）は、意志（Wille）の対立物としてではなく、意志を超えた構えとして規定される。Heidegger は、Gelassenheit が能動と受動、意志することと意志しないことの対立そのものの外に位置づけられると論じた（Heidegger, 1959）。

本稿の成る祈り —— 特に §5.4の「願えない」構造 —— は、Gelassenheit と構造的に深く響き合う。両者ともに、意志することと意志しないことの単純な二項対立を超えた構えとして位置づけられる。ただし Heidegger が Gelassenheit を存在の真理への聴従として展開するのに対し、本稿は成る祈りを透の発動条件として、生成構造の関数として位置づける。

9.2 Eckhart の Abgeschiedenheit

Eckhart の Abgeschiedenheit（離脱）もまた、何かから離れるのではなく、離れることそのものを超えた離脱の構えを指す（Eckhart, 1963）。Eckhart にとって Abgeschiedenheit は神との合一の前提であり、また結果でもある。

本稿の純度 P の動的維持 —— 自我的構造物を瞬間ごとに手放す構え —— は、Abgeschiedenheit と構造的に響き合う。ただし Eckhart の枠組みが神学的・神秘主義的射程を持つのに対し、本稿は離脱を透の発動条件として構造記述上に展開する。

9.3 西田の純粋経験

西田幾多郎の「純粋経験」（西田, 1911）は、主観と客観の分離以前の直接経験として位置づけられる。これは §4.3で論じた主客図式の解消 —— 純度 P の高まりとともに志向性が背景退却する事態 —— と構造的に深く響き合う。

西田の純粋経験は、本稿の透状態に対する最も近接した日本哲学的参照点である。両者ともに主客分離以前の意識構造を主題化する。ただし西田が純粋経験を哲学的経験論として展開するのに対し、本稿はそれを透の発動条件として構造記述上に再定式化する。

---

10 考察と限界

10.1 経験的検証可能性

本稿は概念的・形式的な定式化に留まる。導入した諸変数（P, K, Φ, V(Z), α, β）は、現時点で経験的測定可能性が保証された量ではない。神経科学的指標（EEG の特定周波数帯、心拍変動、皮膚電気活動）との対応関係の検討は今後の課題となる。ただし、これらの変数が完全に物理的指標に還元しうるかは別問題であり、Z = D + iD の枠組みにおいては iD 成分の測定可能性そのものが論点となる。

すなわち本稿は経験的予測理論ではなく構造記述理論として位置づけられる。提供するのは「世界として立つ」という実存的様式の構造の枠組みであり、その経験的発生の予測ではない。

10.2 自己言及性

「透」を「透」として記述する出来事として、本稿自身が一定の純度と覚悟のもとに書かれているという自己言及性は、本枠組みに内在する構造的特徴である。完全な透の記述は原理的に不可能であり、本稿の言説もまた、それ自身が記述しきれない構造的余剰を伴う。この自己言及性の精密な哲学的検討 —— 構造記述理論一般における自己言及的限界、論述の遂行性と記述性の関係 —— は、後続論文「残余の存在論」において体系的に展開する予定である。

---

11 結論

本稿は拡張虚数理論の第三論文として、第二論文「『起こり』の構造論」が整理した「起こり」の上位概念 ——「透」と呼びうる様式 —— を主題とし、その実存論的発動構造を記述した。一言で言えば —— 第二論文が記述したのは「起こりを捕捉する主体」であり、本稿が記述したのは「起こりの媒体となる主体」である。捕捉する主体から媒体となる主体への、この反転こそ本稿の中心的主張である（§2.2）。

中心命題は二層からなる —— 主体が起こりの捕捉者から媒体へと反転すること（第一命題）、そしてその反転が自己の拡張ではなく純化によって成立すること（第二命題）である。この命題を、二つの実存的変数 —— 純度 P（第一衝動への接続度、§3）と覚悟 K（第一衝動に生を懸ける強度＝同一化エネルギーの開通、§4）—— の積として表される成る祈り $\Phi = P \times K$ の構造として形式化した（§5）。透の発動は、ある時点で $\Phi(t)$ が臨界閾値を超えることに伴う相の転移として規定された（§6）。

さらに、第一論文の $Z = D + iD$ を観測の側から記述する観測者関数 $V(Z) = \alpha D + \beta iD$ を導入し、透を $\alpha = \beta = 1$ かつ位相完全同期の理想極限として位置づけた（§6.3）。自然体・無為自然・空との構造的分岐を明示し（§7）、特に「拡張の二層」（表層の拡張 vs 思考領域の拡張）として、純化が単なる引き算ではなく、干渉ノイズを薄めつつ接続先を広げる二重の運動であることを示した（§7.4）。最終的に、界化 —— $\Phi = P \times K$ が臨界を超えた際に構造的に導かれる、裸性・迫力・構造的開放化の三側面として記述される様式 —— を提示し、これを存在論的誘導の構造として位置づけた（§8）。とりわけ —— カリスマと威圧が「強い自我の効果」であるのに対し、本稿のいう迫力は「自我の希薄さの効果」である。界化はこの逆説のうえに立つ。

本稿の主題的特徴は、透を主客分離が解消する地点で立ち上がる様式として捉え、その発動条件を成る祈りとして体系的に記述した点にある。西田の純粋経験論、Heidegger の Gelassenheit、Eckhart の Abgeschiedenheit、道家の無為 —— いずれの先行思想とも対話しうるが、それらを構造記述として拡張虚数理論の枠組みに統合した点が、本稿が新たに展開した論点である。

References

1. 村主悠真 (2026a). 拡張虚数理論：存在の二重構造としての Z = D + iD. Version 1.0, Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20095255
2. 村主悠真 (2026b). 『起こり』の構造論：受動的事後性と「成立を許す」構え. Version 1.0, Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20254107
3. 西田幾多郎 (1911/1990). 『善の研究』岩波書店.
4. Heidegger, M. (1959). Gelassenheit. Pfullingen: Neske.
5. Eckhart, Meister (1963). Von der Abgeschiedenheit. In Die deutschen Werke, Bd. V. Stuttgart: Kohlhammer.
6. Husserl, E. (1913). Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie I. Halle: Niemeyer.
7. Huygens, C. (1665). Letter to the Royal Society. In Œuvres complètes, vol. 5.
8. Strogatz, S. H. (2003). Sync: The Emerging Science of Spontaneous Order. New York: Hyperion.

9. Hatfield, E., Cacioppo, J. T., & Rapson, R. L. (1994). Emotional Contagion. Cambridge: Cambridge University Press.
10. Collins, R. (2004). Interaction Ritual Chains. Princeton: Princeton University Press.
11. Clayton, M., Sager, R., & Will, U. (2005). In time with the music: The concept of entrainment and its significance for ethnomusicology. European Meetings in Ethnomusicology, 11, 1–82.

Tōh: Undistorted Mediation, the Culmination of Prayer 村主悠真 / Yuma Muranushi · 株式会社 il / 虚次元法人 ï.inc Version 1.0 · 2026.06.01 · CC BY 4.0